## P-063

# 在宅で医療的ケアが必要な子どもを育てる母親の自己実現に関する文献研究

草野 淳子[1]、井原 健二[2]、竹野 晴奈[1]

[1] 大分県立看護科学大学看護学部
[2] 大分大学医学部小児科学講座

【研究目的】
本研究の目的は、在宅で医療的ケアが必要な子どもを育てる母親が自己実現のために可能とするものと、障がいとなるものについて文献研究により明らかにし、訪問看護師が支援すべきことを考察することである。

【方法】
電子データベース医学中央雑誌 Web 版を用いて、「障がい児」「在宅」「母親」「就労」「自己実現」「医療的ケア」のキーワードを組み合わせて検索した。母親の自己実現に関する内容が述べられている文献を対象とし、記述を抜き出し内容ごとに整理し分類した。以下の記載の＜ ＞はサブカテゴリ、［ ］はカテゴリ、【 】は大カテゴリを示す。

【結果】
本研究の対象文献は 15 件で、79 のコード、27 のサブカテゴリ、12 のカテゴリ、4 の大カテゴリに分類することができた。【自己実現を可能とするもの】の大カテゴリでは、［通所サービスやショートステイなどの利用がある］、［夫や祖父母などの周囲のサポートがある］、［子どもの健康状態が安定し学校生活を開始する］の 3 つのカテゴリが生成された。【自己実現できたことによるメリット】の大カテゴリでは、［生きがいなどを持ち心理的利益の獲得をする］、［母親が社会と繋がることにより視野の広がりとなる］、［仕事を持つことにより経済的自立をする］の 3 つのカテゴリが生成された。【自己実現するために障がいとなるもの】の大カテゴリでは、［医療的ケア児の重症度が高い］、［ストレスの蓄積による健康状態悪化の不安］、［周囲の協力を得られない苦しみ］、［社会資源が不十分なことによる就労困難］の 4 つのカテゴリが生成された。【自己実現できない場合のデメリット】の大カテゴリでは、［育児やケアによる身体的負担］、［不安やストレスによる精神的負担］の 2 つのカテゴリが生成された。

【考察】
母親は［通所サービスやショートステイ］などの社会資源や、［夫や祖父母のサポート］など家族のサポートにより自己実現をしていた。［生きがいなどを持ち心理的利益の獲得］や［社会との繋がり］を持つことで、精神的健康度の高まりへと繋がっていた。また、母親が自己実現するために障がいとなっていた理由は、[ 医療的ケア児の重症度が高い］ことや［ストレスの蓄積による健康状態悪化の不安］、［周囲の協力が得られない］ことであった。このような場合、慢性的な体調不良へと繋がることから、看護師は母親の生活や体調面にも目を向ける必要がある。

## P-064

# 自閉スペクトラム症の傾向をもつ幼児の発達精神科初診時に対する看護師の関わり

宇野 奈緒美[1]、川波 温香[1]、藤田 千春[2]

[1] 杏林大学保健学部看護学科看護養護教育学専攻
[2] 杏林大学保健学部看護学科

【目的】
自閉スペクトラム症の傾向をもつ幼児（以下、幼児とする）は、他者とのコミュニケーションの苦手さ、限定された執着、こだわりが強い等の特性によって医療機関受診時の困難感があるといわれている。特に初診時は不慣れな場に身を置く不安でパニックにつながりやすいため、その困難が最小限となる看護が求められる。発達精神科外来は ASD 傾向の幼児の来院機会が多いことから、幼児の特性をふまえた関わりがなされている可能性を考えた。そこで本研究の目的は、発達精神科初診時の幼児に対する看護師の関わりを明らかにすることとした。

【方法】
発達精神科外来で 5 年以上勤務し、ASD 傾向をもつ幼児の初診に複数回対応した看護師 4 名を対象に半構造化面接調査を行った。調査内容は、対象者の背景、初診時の幼児への関わりとした。分析は音声データを逐語録化し、幼児の初診時における看護師の関わりが語られている文節を取り出し、コードを作成した。さらに同質性･異質性を検討し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。本研究は杏林大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】
対象者の発達精神科外来での勤務年数は 6 ～ 30 年であった。発達精神科初診時の幼児に対する看護師の関わりは 6〔カテゴリー〕24 ≪サブカテゴリー≫が抽出された。看護師は≪関わり方の事前準備をする≫などの〔安心させるための個別的な特性への働きかけ〕をしていた。また≪安全に過ごせるように環境を整備する≫といった〔安全な受診に対する環境整備〕、〔視覚情報を用いて理解を促す〕ことや、≪幼児の関心を観察する≫といった〔幼児への関わりに繋ぐ観察〕をしていた。さらに、≪診察室内の遊びで出来ることを増やす≫等〔診察時間内に行う事を充実させる〕ことに加え、幼児のパニック時は≪パニックが起きた原因を考える≫など〔パニック予防とパニック時の対応〕をしていた。

【考察】
看護師の関わりは、事前準備から環境整備、そして幼児が安心できるための個別的な働きかけで診察室に適応しやすく退屈せずに過ごせるようにしていたことが明らかになった。また看護師は幼児のパニックが起きた原因を検討していたが、幼児の特性を理解し、再診時の関わりに活かすための前向きなものとしていた。このことから、ASD 傾向をもつ幼児の受診時の関わりには幼児の特性、関心、反応を観察し、得た情報を意識して働きかけに繋げていく必要性が考えられた。



Presented by Medical*Online